# 英雄の外出

笹原　徹二

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
英雄の外出

【Ｎコード】
Ｎ４１０１Ｚ

【作者名】
笹原　徹二

【あらすじ】
学業に身が入らず落第を繰り返す大学生の英雄。彼は将来への具体的な展望も見出せぬまま、文学書ばかりを読みふけり、その日その日を投げやりに過ごしていた。しかし、大学生活もすでに七年目を迎え、さすがに焦りを感じ、今年こそは卒業の目処を立てなければと懸命に気持ちを奮い立たせようとしていた。新学期が始まり半月余り経ったある日、彼は線形代数のレポート課題を提出するために大学へ向かうのだが……。
筆者の愚かしい青春時代の心情や行動を少々滑稽に戯画化すること

により、悩める現代青年の姿の一典型を描いたつもり。筆者にとっては本作品が処女作。

彼の名は合田英雄。歳は二十五。東京のとある大学に通う学生である。大学の裏門近くの古びた安い学生アパートで一人暮らしをしている。名前とはおよそ不釣合いの貧弱な形をした青年で、背は低いほうではないが手足が棒のようにひょろ長く、強風でも吹けば飛ばされてしまいそうな、いかにも弱々しく覇気の無い心許なげな印象を見る者に与える。暗く青白いその顔の瞳の奥には、未だ夢見がちな少年らしさを残したような澄んだ憂いを湛えている。

おそらく、これまでの彼の人生の中で頂点だったと思われるのは、現在通っている大学に合格したことを知った瞬間であっただろう。その後は急落の一途を辿っている。

彼の生い立ちに特別大きな問題は見受けられない。両親と年子の姉一人という典型的な中流の家庭で生まれ育った。彼は幼い頃より内気で引っ込み思案な大人しい性格で、親や学校の先生のいいつけをよく守る品行方正な子どもだった。所謂良い子の典型だったと言える。目立った反抗期も無く、高校を卒業するまで成績も常に優秀だった。

しかし、大学に入った途端に何かがぷっつり切れてしまったように学業には全く身が入らなくなり、彼の成績評価にはDの文字ばかり目立つようになった。それでも、最初の二年程は講義にはほとんど休まずに出ていたのだが、大学生活も三年目になると、講義も次第にさぼるようになっていった。今もって習得できた単位数は卒業に必要な数の半分にも満たず、大学生活はすでに七年目を迎えていた。

彼は工学部の機械工学科に籍を置いていたが、専攻している分野には全く関心が無かった。工学部を選んだのは、人文系に比べて理工系の方が将来就職に幾分有利ではないかという父親のアドバイスに従っただけであった。機械工学を専攻したのは、工学系の中では

最もポピュラーな分野だと何となく思われたからである。別に電子工学でも建築工学でも何でも良かった。彼はただ大学に入れさえすればそれで良かったのである。その後の展望は全く考えていなかった。いや、考えることを極力避けていたのだ。

ただ、高校時代から文学に関心を持つようになり、大学では文学を学びたいと密かに考えていたこともあった。しかし、誰にもそのことを言い出せず、父親のアドバイスにあっさりとその希望を諦めてしまっていた。大学に入ってからも文学部に転部したいと何度か考えたこともあったが、それを実行できるような気概も度胸も彼にはなかった。投げやりに現状に留まっては、時ばかりを無駄に費やしていた。

彼はそんな現実から逃避するように、文学書ばかり読み耽っていた。ひたすら無為と空想と自慰に耽り、物語の世界に溺れていた。酒や薬やギャンブルなどに溺れるようなバイタリティすらなかった。もはや、優等生としての彼の自信やプライドはズタズタであったが、文学書を読み耽ることで、何とかそのプライドを首の皮一枚で支えていた。

当然のことながら、彼の両親はそんな息子の状況に頭を抱えていたが、彼も自らの現状に平気でいられるはずが無かった。今年こそはせめて八年の在籍期限内での卒業の目処は立てなければと、懸命に気持ちを奮い立たせようとするのである。不甲斐ない自分を信じて学費の支払いと仕送りを続けてくれている両親の思いに応えたい気持ちも大いにあった。

だが残念なことに、春に新学期が始まる頃になると、突如思い出したかのように奮起し、ゴールデンウィークも過ぎる頃には急速にやる気が萎えて行くというのが、ここ数年の彼の慣わしにもなっていた。

新学期が始まり、すでに半月余りが経とうとしていた。暖かい日だった。初夏を思わせるほどの清々しい陽気が街全体を覆っていた。

既に桜も散り、ごみごみとした都心の街並みにも、家々の庭先や街路樹などから青々とした若葉の匂いが微かに立ち込めていた。

そんな日の朝である。彼は顔を真っ青にし、狭い薄汚れた学生アパートの一室で、線形代数のレポート課題に苦戦していた。前の晩から食事もせずに必死で取り組んでいた。

線形代数のレポート課題は毎回講義ごとに出された。担当の教授は数学の世界では幾分名の知れている人物らしく、学生達の間では鬼と評判だった。彼はその教授の姿を思い浮かべるだけで身震いがした。いかにも厳しそうな鋭い目つきをした白髪混じりの初老の教授で、常に薄グレーの背広を身にまとい、細い銀の丸渕眼鏡をかけていた。その教授は毎回捻りのある問題をいくつも出題する上に、レポート課題を一度でも出しそびれると、科目終了試験の受験資格を与えなかった。提出期限も厳格に守られた。試験も点数がわずかでも基準に満たなければ、容赦なくD評価を付けた。

彼はこのレポート課題でいつも脱落していたので、今度こそはなんとか喰らいついていかなければと焦っていたのだ。線形代数を履修するのは今年でもう六度目だった。一度で単位を取得出来ない学生は少なくなかったが、彼のように六度目という者はさすがに稀であった。

彼は怒られることを極度に恐れていたため、勉強やレポートの不明な点について担当の教授に質問するなどということはとても出来なかった。相談や協力が出来るような学生の仲間もいなかった。入学してから一年ほどは、共に行動する仲間も多少いたが、次第に彼らとも疎遠になっていってしまった。学業不振の引け目や恥ずかしさで彼のほうから避けるようになっていったのだ。そんなかつての仲間達もとっくに卒業しており、彼はいよいよ孤立の様相を深めていた。レポートにしても勉強にしても、誰にも助力も協力を求められず孤軍奮闘する以外なかったのである。

レポート課題は今日の正午までに提出しなければならなかった。午前中に受けなければない講義もあったが、やむなく休み、レ

ポート課題に取り組んでいた。
　すでに、昼近くになっていた。問題はまだ全ては解けていなかったが、とにかく提出だけはしておこうと、急いで身支度を済ませ、アパートを飛び出す。
　アパートを出ると、隣のこじんまりした小綺麗な一軒家に住んでいる奥さんとばったり会う。奥さんの歳は四十前後。中学生と小学生の二人の娘がいる様子であるが、それを余り感じさせない若々しさがあり、髪はショートカットで目がくりくりとした感じの良い美しい人である。奥さんの旦那さんも同じくらいの年齢で、若い頃に柔道か何か習っていた人のようで、ひどくどっしりとした貫禄のある風体で、彼はその姿も何度か目にしていた。一昨年に家族でその一軒家に引っ越してきており、彼はその奥さんの姿にほんのり心をときめかせていた。
　奥さんは買い物からたった今戻ってきたばかりの様子で、買い物バックを右手に下げていた。奥さんは彼に気さくに挨拶をする。
「こんにちは」
「……あっ、どうも」と、彼も少しはにかんだ表情でやや目を逸らしながら挨拶をし、そのまま大学へと急ぐ。
　レポート課題は、教務課の前の廊下に設置された専用の提出箱に入れることになっていた。時計はわずかに正午を過ぎていたが、提出箱はまだ設置されていた。何とか間に合ったようである。彼は箱の中にレポート課題を入れ、ほっと胸を撫で下ろし、息を切らしながら廊下を一息つくようにゆっくり歩く。
　午後に受けなければならない熱力学の講義まで二時間半ほどあった。そのまま一旦アパートに戻ってもよかった。しかし、アパートを出てくるとき、隣一軒家の奥さんに挨拶されたことを思いだした。『たった今アパートを出てきたばかりなのに、またすぐ戻るのは何だか間抜けな感じがする。それに、もしそんなところをあの奥さんに見られたら、この人何しに出かけたのだろうと怪しまれ、これまでの僕のだらしない生活態度を見透かされるかもしれない。そうな

れば、大学を留年していることもバレてしまうかもしれない。あの奥さんにそんな僕の情けないところは知られたくない。……ダメだ！』

彼はアパートに戻ることは避け、大学の構内で時間をつぶすことにする。まず、学生食堂で昼食を取ることを考えてみるが、ちょうど昼休みに入る頃で、大混雑が予想されるので止めにした。特に春に新学期が始まってしばらくは、溢れ出るほどの新入生でごった返すのが常だった。彼は学生食堂と逆方向にあるサークル棟へと足早に向かう。

彼は大学のとあるサークルに参加していた。そのサークルは、バーベキュー、キャンプ、スキーなどのアウトドアを中心としたレジャー活動をひたすら楽しむための気楽な集まりだった。彼はそのサークルのいかにも大学生的な緩くてお気楽な雰囲気が、ひどく軽佻なものに思われて苦手意識を持った。自身にはとても相容れない気がし、数あるサークルの中でもっとも自分にふさわしくないように思われた。だが、だからこそ選んだというところもあった。

当初、彼はサークルのことを対人関係におけるコミュニケーション能力を養うための修行の場であると仰々しく位置づけていた。大学に入る頃にはすっかり内気で対人関係に苦手意識を抱えるようになっていた彼は、そのような苦手な場というのは、対人関係の修行には最も適していると考えたわけである。

ただ、彼にも人並みに華の大学生活というものを楽しみたい思いもあった。軽佻と思われるものを蔑視し、苦手としながらも、そういうものにどこか強く惹かれてもいた。そのサークルに女子学生がけっこうな人数参加していたことも大きな魅力の一つだった。彼女達との淡い恋のロマンスなども大いに夢見ていたはずである。彼は大学に入れば、そのような恋のロマンスに彩られたバラ色の光り輝く青春の日々が待っていると根拠も無く思い描いており、そのイメージを糧にひたすら受験勉強に励んできたところもあった。

ちなみに、彼自身はそんなことは決して認めようとしないだろう。

女子学生がたくさんいるから参加するなど、実に破廉恥極まる振る舞いに思えた。彼にとってそのサークルに入った動機は、あくまで社会性を身につけるための人間関係の修行なのである。彼は何かを決めたり選択したりする際、しばしばこのような妙な理由付けをした。

大学生活が始まり一月もすれば、当初抱いていた目論見が到底実現出来ないということを彼は思い知られた。サークルの仲間とはいつまで経っても上手く交われずにいた。女子学生などとはほとんど口も聞ける気がしなかった。内気で融通の利かない生真面目な性格も災いしてか、気楽な雰囲気のサークルの中ではかなり浮いた存在になってしまっていた。少なくとも彼自身は痛ましい程にそう強く自覚しており、ひどく居心地の悪さを感じていた。

さらに、大学生活も七年目の現在となっては、自分より五つも六つも年下の後輩ばかりの中で、いよいよ自分の身の置き所が無いようにも感じていた。落第を繰り返しているという引け目も、彼にとってサークルでの対人関係をさらに苦痛で困難なものにしていた。

しかし、それにもかかわらず、未だにサークル室へは足を運んでしまうのである。時々何かに吸い寄せられるように未練がましく足を運び、そこで決まり悪そうに本を読む振りをするのである。

サークル棟は裏門の側にあり、大学の敷地内の大分外れに位置してもり、すぐ傍には大きなグランドと体育館があった。幾分年季の入ったコンクリート三階建てのこじんまりした建物で、一階は主にスポーツ系のサークルと自動車研究部、二階と三階は文化系のサークル中心に使用されていた。サークル室は一部屋が二十数畳から三十畳ほどの広さで、基本的に一部屋を四つのサークルが区分けして使用していた。彼の参加しているサークルのスペースは、三階の中ほどにあり、その部屋の出入り口近くの一角に設けられていた。

彼はサークル室までやってきて、恐る恐るドアを開ける。部屋はひっそり静まり、彼の所属するサークルのスペースにはまだ誰もいない。ほっと胸を撫で下ろし中に入る。

サークル室に普段顔を見せるサークルの常連のほとんどが男子学生だった。彼のサークルには数十名ほどの学生が参加していた。その半数以上は女子学生だったが、サークルのイベントや週二回行われるミーティング以外には、ほとんど顔も出さない者も多かった。普段頻繁に顔を出しているのは、サークルの中心的メンバーの男子学生十名ほどであったのだ。そのせいか、彼らのサークルスペースはひどくむさ苦しい様相を呈していた。

スペースの中央には長方形の小さな木製の古びたテーブルが置かれ、その上には本や雑誌類が暑苦しく散乱し、周りには少し錆付いているパイプ椅子が無造作にいくつも置かれていた。正面には大きな窓があり、出入り口から向かって右側には本や雑誌類、ノート、アルバム写真などが乱雑に収められている本棚が並び、他のサークルのスペースとの仕切り役も果たしていた。床は塵や埃に塗れ、すっかり色褪せてしまっている少年マンガ雑誌なども落ちたまま放置されていた。

彼はテーブルの上に散乱した本の中から一冊の文庫本を選び出し、出入り口から最も近くにあるパイプ椅子に腰をおろす。本の内容はどうでも良かった。手持ち無沙汰で決まり悪くきょろきょろしているより、とりあえず本を開いて見ていれば、誰かに姿を見られても何とか格好はつくと考えたのだ。

少し経つと、サークル室の外から、快活な男子学生達の喋り声が聞こえてくる。

『こっちに来ないでくれ！』

心の中で祈るように強くそう呟く。しかし、無残にもサークル室のドアが開いて現れたのは、同じサークルの後輩の男子学生二人だった。

二人はいかにも今時の遊び好きそうな若者らしく、兄弟のようにそろって少し長めの髪を無造作にふんわりと赤茶けさせ、肌は健康的な小麦色に染まり、だらりとした長袖のシャツとダボダボのジーンズというラフな格好をしている。

一瞬の沈黙がその場を覆う。彼には二人の目つきがひどく鋭く感じられ、自分がこの場所に存在していることを非難されているように思われた。

「こんにちわー」

二人は彼に挨拶をする。彼も首を少し突き出し無言で二人に会釈する。二人は彼の前を通り過ぎて奥に陣取り、二言三言しゃべった後、黙ってテーブルに置いてあったサークルの伝言ノートを読みだす。彼の身体は緊張でこわばりだす。

『どうしよう。僕はここで何か話しかけるべきなのだろうか？　このまま黙っているべきなのだろうか？　話し掛けるとしたら話題はどんなことがいいのだろう？　変なことは言えない。バカにされたり怒らせたりするかもしれない。一体どんな表情でどんな態度を示し、そのときの声色はどんな具合にすればいいのか？　視線はどこへ向ければいいのか？　身体の向きは？　手の位置は？　ああ、わからない。考えれば考えるほどわからない。一刻も早くここから逃げ出したい……』

しかし、ここですぐにサークル室を出て行くと、二人に対して当てつけのように拒否の姿勢を示すことに思われたし、二人への敗北宣言にも思えた。そのまま本を読む振りをしながら、じっと我慢するのである。

少し経つと、さらに同じサークルの後輩の男子学生三名がぞろぞろと入ってくる。昼休みということで、他のサークルのスペースにも学生が続々と来だして、サークル室の中は賑やかになってきていた。彼はというと、後輩の男子学生達に囲まれ、眩暈がするほど身の縮む感覚が強まってくるのを意識していた。

『いよいよまずい状況になってきた……』

男子学生達は入ってくる際に、一応は先輩である彼にも挨拶はするものの、その後はまるで彼のことなど忘れたかのように振舞う。少なくとも彼の目にはそう映る。

男子学生達は購買部でおにぎりやサンドイッチなどを買ってきてい

て、ガサガサと音を立てながら食べだしていた。すっかり和やかな雰囲気になってきて、話題はサークルに入ってきた新入生の女子学生のことで盛り上がり出していた。後輩達の中でも最年長のリーダー格の男子学生がこう切り出す。
「先週ミーティングに来てたさあ、坂田さんって結構かわいくねーか？」
　それに後輩の一人が答える。
「そうですか？　顔はまあまあですけど、なんかちょっと派手じゃなかったですか？」
「そこが良いんじゃねーかよ。顔もかわいいし、スタイルも良いしさー」
「そう来ると思いましたよ。先輩ギャル好きですからね。俺はチャラい女はダメなんで、その娘は俺的にはナシですね」
「あっちもお前のことなんて眼中なしだろうけどな。気持ちは解るよ。お前はどうせ純情可憐な処女じゃなきゃダメなんだろ？」
「ええ、出来れば……」
「いい加減目を覚ませよ。だからいつまでたっても彼女出来ねーんだよ。今時大学生で処女なんているか。いたとしてもブスばっかじゃねーの」
「そんなこと無いですよ。世の中の処女率は意外と高いと俺は睨んでますね。マスコミの情報なんて当てになんないですよ。それに、ブスより美人の方が敬遠されがちなんで、かえって処女率高いらしいですよ」
「お前のその情報源もどうせネットだろ？　ネットの情報もあんまり当てになんねーぞ。まったくお前みたいな奴がそのうち二次元に走るんだろうな」
「勘弁してくださいよ。それは無いです。俺は四六時中三次元女子のことしか考えてない至って健全な精神の持ち主ですから。それに、絶対処女じゃなきゃダメってわけでもないですし……。ビッチが嫌なだけですよ。……まあ、二次元は嫌いじゃないですけどね」

「おいおい、やっぱりそうなんかい」
ここで、別の後輩も話題に入ってくる。
「俺は木下さんって娘が良いと思いますね」
「誰それ？」
「眼鏡かけてて髪がおかっぱの結構ぽっちゃりした娘です」
「そんなやついたか？」
「先週のミーティングには来てましたけど、覚えてないんですか？
かわいい娘以外は眼中なしですか。相変わらず面食いですよね」
「違うんだよ。俺はピュアで一途な男だから、かわいい、ブス関係なく基本的にタイプな女意外は視界に入らねーんだよ。……つうかさあ、お前はそいつのことかわいいと思ってねーのかよ」
「顔は地味ですね。服もダサいです」
「じゃあ、そんなやつのどこが良いんだよ？」
「……胸でかいんですよね。ありゃ相当巨乳ですね」
「でた！　でたよ。お前はいつもそんなとこしか見てねーよな」
そんな会話が繰り広げられている中、次第に彼は自分が爪弾きにされているのだと僻み始める。
『みんな僕の存在を無視している。僕のことをバカにしている。……どうせ僕はくだらない戯言さえもろくに言えない根暗で無能な人間だ。いてもいなくてもどうでもいい存在なんだ。勉強もろくにせず、落第ばかりしているダメな人間なんだ。僕みたいな頭の悪く面白味の無い余計者はすぐにでもいなくなった方が良いんだ……』
しかし、彼にもプライドは残っていた。人並みに先輩としての面子を保持しなければという思いもあった。むしろそういう思いは人一倍強かった。ここで彼は後輩の男子学生たちに対し、何とか先輩風を吹かそうと懸命に努めるのである。
彼は意を決し、間の悪い唐突なタイミングでたどたどしく叫ぶようにしてこうたずねる。
「君らは昼メシは食べたのか！」
場は一気に静まり返り、視線が彼に集まる。しばしの沈黙の後、

リーダー格の男子学生が苦笑を浮かべ、やや言いづらそうに回答する。
「ええ、まあ、今食べてますけど」
「……そうか！」と、言ったきり彼は口をつぐんでしまい、再びその場が静まり返る。ここで、別の男子学生が助け舟を出してくる。
「合田さんは食べたんですか？」
「……まだなんだよ！　……」
その後が続かない。もうそれっきり黙って下を向いてしまうのである。彼は激しく動揺しながらも、ことさら大げさに澄ました表情を作り、再び本に目をやる。顔は真っ赤になっている。すっかり妙な雰囲気になってしまった。男子学生達は少し苦笑を浮かべて顔を見合わせ、何事もなかったように再び喋りだす。
『何を言っているのだろう僕は。こんなわかりきっていること聞いてどうするのだ……。こんなことなら何も言わなければ良かったのに。一体僕はどうしたいのか自分でもわからない。……ああ、もうダメだ！　僕はダメだ！　こんなちょっとした日常会話をすることですら、綱渡りをしているような気分にならなければならないとは……』
彼は自分が大量の脇汗をかいていることに気づき、ますます居たたまれなくなってくる。今にも男子学生達の誰かが自分に殴りかかってくるような気がした。もう一刻も早くサークル室から出たかった。それでも、しばらくはじっと耐えていたが、ついには我慢できなくなり、そっと立ち上がり、本を置く。
「……じゃあ、お先」
蚊の鳴くような声でそう言い、サークル室を出ようとする。こんな何気ない挨拶も彼にとっては一大決心を要するのだが、誰もそのことに気づかないのか男子学生達からは何も反応がない。三人は再び女の子談義に華を咲かせだしている。話題の対象が少し変わったようで、最近売れ出している某若手女優の名前なども聞かれる。彼ら以外の二人は黙々と携帯電話をいじりだしたりマンガ雑誌を読み

はじめていたりする。彼はこれを無視されたと捉えるのである。
『やはりそうなのか。みんな怒っているのか。僕がろくに会話も出来ない、つまらない奴だから怒っているのか。いや、バカにしているのだ。呆れているのだ。きっと僕が留年していることも軽蔑してるに違いない。……畜生！　ゲス野郎どもめ！　女の子の胸がどうとか、卑猥で低俗なことばかり喋りやがって！　こっちは身を下げてそんなお前らにつき合ってやってるんだ！　……ああ、ダメだ。何考えているのだろう。こんな僕はバカにされても当然なのだ。仕事もしなければ本気で学業にも取り組まず、落第を繰り返し、そのうえ人と会話もろくに出来ず、社会性も皆無、それを補えるような才能もなければ努力もしてない。本当に何の取り得も無いじゃないか！　一体誰のことを非難できるのだろう。僕より彼らの方がよっぽどましだ。あんな下らない会話していても少なくとも学業という学生としての義務はきっちり果たしている。まったく何たる屈辱的な情けない現実なのだろう。ああ、ダメだ。僕はなぜこんな僕なのだ……』
　彼はすっかり打ちのめされて外に出る。春の麗らかな風に当たると、若干気分が落ち着く気がした。
昼休みに入ってから幾分時間も経っていたので、学生食堂の混雑も多少は解消されているだろうと見込み、何とか気を取り直して学生食堂に向かうことにする。彼は人込みを歩くときの、いつものいかにも落ち着きなく怯えたような面持ちで、少し顔をうつむかせてせわしなく足早に学生食堂へと向かう。
　学生食堂は正門の側にあり、サークル棟からは三百メートルほどの距離があった。構内の通りは、学生達が行き交う姿で華やぎ、特に女子学生の姿は彼の目を大いに惹きつける。
　しばらく歩くと、数十メートル程先に一際背が高く身体つきの良い一人の女子学生の姿が目に止まる。否が応でも彼の胸は激しく高鳴る。その女子学生は一昨年から時々見かけるようになり、これまでも何度かすれ違うことがあった。名前も学年も判らなかったが、

文学部に在籍しているのは確からしかった。色白で顔立ちも品よく端正に整っており、彼はその姿に密かに強く惹かれていた。
女子学生は純白のブラウスと水色のタイトミニスカートという涼しげな格好で、颯爽と彼の方に向かって歩いて来ていた。遠目からも滑らかで優美な身体のラインがはっきり見て取れた。
女子学生との距離が縮まるにつれ、彼の一挙手一投足はさらにぎこちなくなっていく。視線は女子学生の微風にさらさらとなびく長い黒髪、柔らかそうで豊かな胸の膨らみ、スカートの下から長く真っ直ぐに伸びた脚線美へと向けられる。しかし、お互いの視線を確認できるほどの距離になると、彼は顔を少し横に向け不自然に視線を逸らす。女子学生の肉体美をくまなく目に焼き付けたい衝動を抑え、ことさら大げさに相手には無関心であることを示そうとするのだ。
しかし、虚しい抵抗であった。誘惑には勝てない。三、四メートル程の距離まで近づくと、女子学生の胸元の少し襟が開いて素肌の露出した部分にちらりと目をやり、そのまま恐々と視点を上に移動する。目が合った。女子学生は胸元を手で覆うような素振りをし、少し顔をうつむかせ、澄ました表情で彼の横を通り過ぎる。彼はため息をつく。
『また負けだ。完全なる敗北だ。どうしても誘惑に勝てない。あの美しさを前にしてはまったくの無力だ。永遠に負けつづけるのだ。僕はこうしていつも淫らな情欲に身を任せ、あの艶々とした素肌に顔を埋めることばかり考えてしまうのだ。おまけに、この敗北感と屈辱感がいよいよ僕の情欲を自虐的に掻き立てる。……ああ、僕は何て汚らわしい人間なのだろう。こんな僕には、サークルの奴らのことを低俗だのと言う資格なんて全くないではないか。むしろむっつり陰にこもっている分、僕のほうが遥かに醜悪だ。きっと、あの女子学生も変質者を見るような嫌悪と軽べつの眼差しで僕を見たに違いない。……畜生！　阿婆擦れめ！　少しばかり容姿に恵まれているからってお高くとまりやがって！　……何故こんなことが起き

るのだろう。この情欲を満たすために、例え相手がどんなに性悪たったとしても、例え相手からどんなに忌み嫌われるとしても、物乞いをするように哀願しなければならないのだろうか？　相手に気に入られるためにどんな努力も惜しんではならず、どんな屈辱にも奴隷のように甘んじなければならないのだろうか？　それが自然の摂理とやらで、人間のオスに生まれた者の定めとでもいうのだろうか？　これは悲劇だ。とんだ悲劇だ。僕は呪う。あの肉体美を呪う。情欲や本能を呪う。自然の摂理を呪う。どうせ僕は何の取り得も無い醜い男だ。薄汚い飢えたケダモノだ……』

彼は顔をうつむかせ、下唇を噛みながら学生食堂の建物の近くまで来ていた。建物は、正門から三十メートルほど入ったところの教務課のある本部棟のすぐ手前にあった。少し平たいこじんまりした二階建ての建物で、一階は学生食堂と購買部、二階は書店とカフェがあった。昼休みもそろそろ終わろうという頃で、学生の姿は若干まばらになっているものの、まだ多くの学生が建物の出入り口付近を行き交っていた。

学生食堂がある建物の少し手前の路上で、学生の男女二人組が道の両端に分かれてビラ配りをしている光景がふと彼の目に止まる。どうやら演劇サークルの部員が新入生の勧誘も兼ねて行う舞台の宣伝ビラを配っているようだった。

「よろしくお願いしまーす！」と、二人は声を張り上げてビラを配っていたが、それを受け取る者はほとんど見られない。彼はふと二人が気の毒に思い、自ら進んでビラを受け取ろうとする。受け取ることで、少しでも彼らに協力したいという彼なりの思いやりを示したつもりだった。彼は向かって左側に立っていた小柄な女子学生からビラを受け取ろうとするが、タイミングが悪かったのか、彼だけにビラは差し出されない。左手は虚しく空を掴み、行き場を失う。彼は慌ててその手を頭に持ってきて、髪を掻き分ける振りをするのである。そして顔を真っ赤に染める。

『何たる屈辱だろう。善意を拒否された挙句、恥までかかされると

は……。やはりみんな知ってるのだ。僕の怠惰な生活態度を。勉強も出来ずろくに人とも話せない無能さを。さっきの女子学生に向けた僕の汚らわしい情欲を。結局、何もかも見透かされているのだ。だからみんなして僕に意地悪するのだ。……ああ、何故僕はこんな僕なんだろう。こんなに屈辱を覚えても、僕は一体自分以外の誰を責めればいいのだろう？　いや、もう自分を責める以外は無いのだ。もはや自己嫌悪でしか自らの情けなさや醜悪さを償えないのだ……』

彼は下唇を噛みながら眉間にうっすら縦皺を寄せ、学生食堂に足を踏み入れていた。中にはまだ学生の姿が多く見られた。彼はすぐさま引き返す。人のたくさんいる場所では、どうしても食事が出来なかったのである。

彼は少し時間をつぶすため、書店で本の立ち読みをしようと二階へ上がる。しかし、そこでも同じサークルに参加している顔見知りの男子学生が本の立ち読みをしている姿を確認するや否や、再び引き返すのである。相手に気づかれ、挨拶を交わし合ったりする事態になることがひどく難儀に思われた。自分の今の醜い心情を気づかれる気もした。

ここでふと、図書館で時間を少しつぶそうかという考えも浮かぶ。しかし、留年三年目という事実がその実行を阻むのである。落第ばかりしている自分が図書館などへ行くことは、ろくに勉強も出来ないくせにいかにも勉強している体裁だけ取り繕うことのように思えるのである。彼はもう図書館へは行けなくなっていた。

アパートに戻るのもまだ少し早すぎる気がした。たった今出てきたサークル室に戻るのも何だか間抜けに思え、とても戻れる気がしない。学外の飲食店で食事をすることも彼は出来なかった。普段大学の学生食堂以外で外食などほとんどしないため、こういうときに時間をつぶせるような店なども全く知らなかった。

彼は街中で外食することがどうしても出来なかった。学生食堂以外での外食は高くつくからという経済的な理由もあったのだが、彼は街中の飲食店に一人で入ると、なぜか大海に一人放り出されたよ

うなひどく心細い気持ちになってしまい、ほとんど気を失いそうになるため、どうしても街に出て外食が出来ないのである。
普段の彼の行動範囲は実に狭く、アパートと大学の間を行き来する以外は、せいぜい買い物の際に訪れる近隣のスーパーマーケットや、時々立ち寄る書店や古本屋を二、三知っているくらいだった。それに、あと十分もすれば学生食堂は大分空くはずだと考え、その十分のためにわざわざ学外に出て感情的なリスクを冒すのもバカらしく思えたのだ。街中の書店や古本屋で時間を潰そうにも、距離的に往復するだけでも十分以上は簡単に経過するので、それもバカらしく思えた。
だが、彼にとってその十分がなんと長いことか。ベンチで座っていようか、空いている教室で少し待っていようか、などとも考えてもみるのだが、自身のそんな姿は、いかにもどこにも行く場所が無くて一人寂しく時間を持て余していることのように思えてくるのだった。結局、彼は万策尽きた心許ない思いで付近を怪しげに行き来するのである。
『……ダメだ、もうどこにも僕の居場所が無い……』
周りの学生たちが皆哀れみと嘲笑の目で自分を見ているように彼には思え、身体が紙切れほどの薄さに押しつぶされるような居たたまれなさを感じていた。しかし、よくよく彼らを見てみると、誰も自分のことなど見てないことに気づき、まるで自分という存在がそこに実在していない幻であるかのような錯覚にも陥ってくるのだった。ふと、噴水の傍の芝生に寝転んで楽しげに会話する学生男女のカップルの姿も目に入るが、そんな光景は永遠に自分の手には届きそうにない儚い青春の夢に思えるのだった。
すでに彼の喉の奥では小さな嗚咽が起き始め、瞳も涙で潤みだしていた。今にもその場にしゃがみ込み、大声で泣き出してしまいそうであったが、そんな事態だけは是が非でも避けようと、結局はすぐに学生食堂で昼食を済ますことを決断するのである。
彼は何とか気を取り直すため、そっと深呼吸し、努めて傲然と顔

をしかめ、勇気を振り絞って学生食堂に足を踏み入れる。改めて中を見渡してみると、思ったよりも学生の数は少なくなっており、少し安堵する。

ここで学食メニューのサンプルディスプレイに彼の目が止まる。今日の日替わりランチは肉厚のある大きなトンカツがおかずだった。彼はその光景に激しく惹かれながらも一旦目を逸らす。

彼は食事のメニューを選ぶとき、食べたいと思ったメニューを選ぶことがどうしても出来なかった。学生食堂で食事をする際、大抵はB定食を選んだ。おかずが他の定食メニューに比べ少々見劣りしたというそれだけの理由からである。値段のことは全く関係なかった。彼は食べ物に限らず好きなものをなかなか選べなかったのだ。余程強く誰かに勧められ渋々それを選択したという形を取るなど、何らかの他の理由付けが出来ない限り好きなものを選べなかった。美味しいから、好きだからなどという理由だけで対象を選ぶことは、彼にとっては欲深い卑しむべき利己的な振舞いに思われた。特に生理的な欲求や好き嫌いにそのまま従うことを恥とした。それは自分の好きなものや欲しているものを明らかにすることで、あさましい動物的な欲望をさらけ出してしまうことにも思えた。

また、彼は変に同情深いところがあり、気に入られず選ばれなかったものが妙に気の毒にも思えてしまい、気に入らないと思えば思う程それを選ばなければならない気持ちにもなってしまうのだった。好きな方を選べば、後々何らかの報復や罰を受けるなどの大きな代償を支払わなければならない気もした。

妙なことに、彼は自分が欲求や感情のままに何かを選択すると、その罰として両親の身に交通事故などの何か重大な不幸が起きるような気さえした。

とにかく、彼は自らの意思をはっきりさせて何かを選択するということが、特に生理的欲求が絡んでくる場合、ひどく不得意だった。

ただ、今日は少し違った。日替わりランチのおかずがトンカツだったのである。トンカツという文字だけでも彼の空腹中枢は否応無

しに強く刺激された。彼は幼いころよりトンカツにはとりわけ目がなかったのだ。それだけに、彼はトンカツ食べる機会を自ら求めることを頑なに禁じざるを得ず、大学に入って一人暮らしをするようになってからはトンカツを食べる機会をほとんど持てなかったのだが、そのことがトンカツへの想いを増幅させていた。そんな状況の中、思いがけず目前でトンカツの姿を目にしてしまい、しかも昨晩から何も食べていないことによる空腹も相俟ってか、なお一層トンカツの誘惑には抗し難くなっていたのだ。

さらには、ここで何かとんでもなく大胆な行動に出て、滅入った気分を吹き飛ばしてやるのだという憤りにも似た思いがあった。彼はトンカツがどうしても食べたくなってしまった。

彼は目を皿のように大きく見開き、唾を飲み込みながら日替わりランチのサンプルディスプレイを再びまじまじと眺めるが、なかなか食券は買えず、券売機から数メートル離れた自販機の前に立ち、飲み物を選ぶ振りをしながらきょろきょろと怪しげに様子を伺う。すると、髪を明るく染めた少々派手な身なりの所謂ギャル風の女子学生の二人組が、メニューを見ている光景が彼の目に映る。そして、二人の気だるい口調の会話が彼の耳に入ってくる。

「なんか、今日の日替わりトンカツだってぇ」

「まじぃ。チョーうまそーじゃん」

二人は券売機の前まで来て、何の躊躇もなく日替わりランチの食券を買っていった様子だった。彼はその光景を軽侮の眼差しで見守る。

『まったく、あの阿婆擦れどもときたら、欲望に忠実で実に卑しい限りだ。……あんな阿婆擦れどもが大学生としてこの大学の構内を闊歩してるとは、つくづく僕も酷い時代に生きている……』

しかし、一方で彼は羨望の眼差しでこう嘆くのである。

『ああ、あんな風に何のこだわりもなく食べたいメニューを選べたらどんなに幸せか！　なぜいつもこう我慢ばかりしなければいけないのだろう。僕だってたまにはルールを破って逸楽を享受したって

いいじゃないか！　これまで十分に我慢してきたのだし、今日くらい破目を外したって許されるはずだ。人は時に罪を犯す勇気も必要なのだ……』

彼は意を決し、日替わりランチの食券を買うべく券売機の前に立つ。そして小銭を入れる。この彼にとっては背徳的ともいえる自身の行動の大胆さにひどく恐れおののき、異様に興奮していた。そのせいか、手を滑らせてしまい、百円玉を落としてしまう。百円玉は無残にも券売機の下に転がり込んでいく。

ここで、彼は百円玉を落としたアクシデントに気づかない振りをする。券売機の下に手を突っ込み、弄りながら百円玉を拾うという行為をしたくなかったからである。そのような行為はひどく意地汚く屈辱的に思われた。もちろん、百円玉は惜しかったが、それ以上に意地汚い行為を見られて恥をかくことを恐れていた。また、そんな恐れを抱いていることも誰にも感づかれたくなかったのだ。

小銭だけでは足りなくなったので、券売機に千円札を入れることにする。だが、ここでもすんなりとは行かない。券売機はなかなか彼の千円札を受けつけないのだ。彼は顔を真っ赤にし、何度も千円札を入れようと冷や汗をかきながら悪戦苦闘する。ようやくのことで千円札を入れ、ついに日替わりランチのボタンを押す。しかし、彼の試練はまだ続く。今度は食券が出てこないのだ。みるみる彼の顔は青ざめていく。

『これは僕に対する嫌がらせだろうか？　やはりトンカツを食べてはならないという天の声か？　……畜生！　機械まで僕をバカにしやがって！　なぜいつもこうなるんだ！　なぜ僕が好きな物を食べちゃいけないんだ！　なぜみんなして僕に意地悪するんだ！　無能だからか？　怠惰な生活を送ってるからか？　淫らな空想ばかりしてるからか？　……頼む！　もう勘弁してくれ！　出てきてくれ！』

彼は少し狂ったように執拗に何度もボタンを押す。しかし、出てこない。もう完全に打ちのめされ、パニックに陥ってしまっていた。頭は真っ白になり、どうしていいか分からなくなってしまい、彼は

成す術もなく券売機の前で立ち尽くしていた。ただその場から逃げたいとだけ思った。
そして、ついに千円札もそのまま放置して逃げ出そうとした瞬間、ふと、ボタンに表示された売り切れを示すランプにようやく気づくのである。
「アヘェー……」
彼は苦しそうなため息に似た声を出し、独り顔を真っ赤に染める。どうやら、今日の日替わりランチは、先ほどの二人の女子学生が手にした分で最後らしかった。
『……やっぱり悪いことは出来ないようだな。でも、きっとこれで良かったのだろう。もしこのままトンカツを食べたら、とんでもなく大きな代償を支払うことになったかもしれない。これはみんな僕を悪事に走らせないための天の差し金に違いないのだ……』
彼はそう心の中で呟き、物事が収まる所に収まったような、妙に納得した気分になるのだった。それは諦めにも似ていた。
彼は周囲をきょろきょろ見渡し、誰も自分の姿を見ていないことを確認してからホッと胸を撫で下ろす。ただ、動揺した気持ちはなかなか収まりそうになかった。昼食を求めて学生食堂に入って来た学生の姿もちらほら見られたこともあり、とにかく券売機の傍から離れたかった。急遽いつも食べているB定食のボタンを押し、慌てふためきながら不器用な手つきで食券とお釣りを取り出し、逃げるようにそこから離れる。そして、いつものように盆と箸を手に取り、食券をカウンター越しに厨房にいる人の良さそうな小太りのおばさんに渡す。この辺りの動作はなかなか機敏だった。
「チキンカツ定食ねー」と、おばさんは愛想良く応じるが、彼は再び唖然としていた。どうやらおばさんは、彼の渡した食券をチキンカツ定食のものと勘違いしているらしかった。彼は自分の渡した食券がB定食のものであると懸命に知らせようと努める。
「あ、あの……B定食……」
しかし、声がかすれてしまい、おばさんには届かない。再び彼の

表情はみるみる青ざめていく。
『まずい！　チキンカツ定食はB定食より五十円高い。もし、ここでこのまま間違いを正せずにチキンカツ定食を食べるようなことでもすれば、僕は完全に盗人になる。相手の間違いを利用して、払った代価以上のものを享受するなんて卑怯な真似はとてもできない。それこそ許されぬ大罪だ。ここで間違いを正せないのなら、この先ずっと卑怯で臆病な犯罪者として自らを蔑まなければならなくなるだろう。そうなれば、僕はますます自信を失うばかりだ。……それに、もしこのまましらばくれてチキンカツ定食を食べて欲望を満たし、後でそのことを誰かに気づかれたらとんでもないことになる。僕はどれだけ軽蔑されても罵倒されても仕方なくなるのだ。……もしかしたら僕は詐欺罪で逮捕されるかもしれない。そんなことになれば、いよいよ家族にも親戚にも迷惑をかけ、誰にも合わせる顔が無くなる。それはなんという恐ろしい事態だろう。もうこれ以上は落ちぶれるわけにはいかないのだ。このままチキンカツ定食を食べるわけにはいかない。……ああ、早く言わねば！　チキンカツ定食の用意が出来てから間違いを指摘しても遅すぎる。何で早く指摘してくれなかったのかとおばさんにこっ酷く叱られるかもしれない。……そんな恐ろしい事態も何としても避けなければ！　愚図愚図はしていられない！　急げ！』
彼は勇気を振り絞り、目を大きく見開き鬼気迫る表情で叫ぶ。
「ビーテーショク！」
厨房内に甲高く響いた彼の声に、おばさんは驚いて手を止め、彼の方を見る。おばさんだけでなく、厨房にいた他の従業員も何事かと彼の方に目をやった。
「えー？　B定食？」
おばさんはそう言いながら、急いで彼の差し出した食券を取り上げ再確認する。
「チキンカツ定食だよね？　ほら」
おばさんはそう言い、少々怪訝そうな顔つきで彼の方に食券を見

せる。彼は再び唖然とする。食券を買う際、余りに気が動転していたせいなのか、どうやら彼は間違って隣のチキンカツ定食のボタンを押したらしかった。

未だ状況を飲み込めず唖然としたままの彼を他所に、おばさんは再びいそいそと盛り付けの準備を進めはじめるが、すぐに彼の様子に感づき、確認するようにこうたずねる。

「もしかしてボタン押し間違えちゃった？」

彼はそう聞かれると、はっとして右手に握ったままだったお釣りの金額を慌てて計算してみる。何度計算してみても、どうやらチキンカツ定食の食券を買ったことは確からしかった。

「アヘェー……」

ようやくのことで状況を飲み込むと、彼は再び苦しそうなため息に似た声を出し、顔を真っ赤にする。おばさんはそんな彼の様子を見守り、少々呆れ気味に微笑み、少し急かすように確認する。

「チキンカツ定食でもいいよね？」

「あっ、はい。……すいませんでした」と、彼は顔を引きつった笑顔で不自然に歪めながら謝る。

もう、散々であった。しかし、思わぬ幸運が彼に転がり込んできていた。トンカツほどではないがチキンカツもかなりの大好物で、彼にとってチキンカツ定食は長らく高嶺の花のメニューだった。一度は口にしてみたいものだと常日頃から密に思いつつ、決して自分からは求められずにいたのだ。

彼の眼前で、ご飯、味噌汁、チキンカツ、キャベツ、レタスが手際良く盛りつけられていく。彼はお釣りを財布にしまいながらその過程をじっと眺める。香ばしくカラッと揚がった黄金色のチキンカツは、彼の唾液腺を大いに刺激した。

未だ手を震わせ、動悸も収まっていなかったが、彼は込み上げてくる笑みを懸命に押し殺していた。憧れのチキンカツ定食を口にする機会が思いがけず到来したのだ。そのことが彼には天からの温情にも思われ、これまでの自身の無様な姿も忘れてしまうくらいだっ

た。
「はい、どうぞー」
おばさんは愛想良く笑顔で彼にチキンカツ定食を渡す。そして、彼は渡されたチキンカツ定食を手に、食べる場所を探すべくきょろきょろ周りを見渡す。
学生の姿は大分減っていた。食堂の一番奥の壁際に、誰も座っていない大きな長テーブルが一つあった。場所は決まった。彼は笑みを押し殺し、転ばぬように用心深くその長テーブルまで歩き、ことさら大げさに不機嫌そうに顔をしかめ、うやうやしく席に着く。
彼の選んだ場所は、その長テーブルの学生食堂の出入り口から向かって手前側の一番左端だった。顔は窓に向き、背中は厨房や券売機のある方に向けられていた。彼にとっては絶好の位置だった。そうすれば、食事をするときの顔をほとんど誰にも見られずに済むと思ったからだ。彼は何より食べ物を口に入れる瞬間を誰かに見られることを避けたかった。それは何か動物的な欲望をむき出しにする瞬間にも思え、自身のそのときの表情はどんなに醜く間抜けになるだろうかと憂慮されたからである。
「フゥー……」
思わず大きく息をつく。安堵したのである。彼は全身が冷や汗でじっとりとしているのを意識した。未だ手の震えも動悸も収まっていなかった。そこで、もう一度深く深呼吸をし、周囲を伺い、誰も自分の方を見ていないことを確認してから、ゆっくりと食べ始める。
もちろん、彼のことである。いきなりチキンカツをほおばるなどということはしない。最初に好きなおかずに手をつけることは、ひどく意地汚く下品に思えた。なるべく上品にスマートに食事をしたかった。
彼にとっての上品な食べ方とはこうである。まず背筋を伸ばし姿勢を正す。そして、サラダに手をつけ、次に味噌汁を少し啜り、ご飯を少量口に運ぶ。それを三度ほどゆっくり繰り返した後、ようやくチキンカツに手をつけるのである。チキンカツは少しずつ切り分

けながら食べていくのだが、このような場合、あたかもナイフで切り分けたかのように箸で綺麗に小さく切り分けるのが彼のこだわりであった。小さく切り分けるのは食べ物を口に入れる際に、出来る限り大きく口を開けないためでもあった。

『美味しい……』

深く恥じらいつつも心の中でそう呟く。学生食堂で食事をする時間は、彼の数少ない心落ち着けるささやかな至福のひと時だった。彼はそんな時間をいつまでも味わっていたいとばかりに、ゆっくりと食事を進めるのであった。

しかし、そんな至福のひと時も、あっけなく終わりを告げる。彼は自分の着いていた長テーブルの右端の向かい側に、女子学生が一人やってきたのを横目で意識する。視線をそっと右にずらし、よくよくその女子学生を確認すると、先ほど学生食堂に向かってきていた途中ですれ違った、背の高く身体つきの良い女子学生だった。

ここで女子学生と一瞬目が合う。女子学生はすぐに視線を逸らし、一度軽く髪を撫でるような仕草をし、肩にかけていた手提げカバンを椅子に置いてから券売機の方に向かっていった。にわかに彼の身体に緊張が走る。そして、彼のデーモンが彼にこう囁くのである。

『彼女はお前に惚れている……』

彼はその声に大いに心を惑わせることとなる。

『……確かに彼女は僕に惚れている。おそらく僕のことを追いかけてきたのだろう。これは単なる自惚れか？　いや、少なくとも僕のことを飢えた薄汚いケダモノとは見なしていない。もし、僕を忌み嫌っているのなら僕を避けるはずで、同じテーブルには来ないはずだ。それに目が合ったし、あのときの髪を撫でる仕草はどうだろう。これは間違いない。彼女は僕に惚れているのだ。僕にわざわざ気持ちを示しにここまで引き返してきてくれたのだ。……先ほどすれ違ったときの胸を隠すような仕草。あれは好きな異性の視線に対しての乙女の可憐な恥じらいだ。決して僕を警戒する仕草ではなかったのだ。おそらく僕の佇まいからは、情欲に満ちたいやらしい目つき

の背後からでさえも何かしらの精神の高貴さを感じさせる雰囲気が漂っているのかもしれない。おそらくそれに彼女は惚れたのだ。そうだ、きっとそうに違いない。……さっき僕はなんてひどいことを考えたのだろう。……君に淫らな情欲を抱いたことを許してくれ！

阿婆擦れ呼ばわりしたことを許してくれ！　美しさを呪ったことを許してくれ！　僕は間違っていた。君の清らかな愛に気づけなかったのだ。でもこの間違いに気づけたことが嬉しい。君ためなら喜んで間違いと敗北を認め懺悔しようではなか。そして、快く君の愛を受け入れよう……』

しばらくして、女子学生が戻ってくる。彼は女子学生の食べようとしているメニューが何であるかを確かめようと、再び視線をそっと右にずらす。メニューは彼が食べているのと同じチキンカツ定食だった。もはや彼は笑みを押し殺せなくなっていた。

『やはり、彼女は僕に惚れている。もう決定的だ。人は好意を持つ相手の行動や仕草を真似ようとするというではないか。彼女もきっとそうだ。僕を真似たのだ。これは間違いない。例え僕を真似たのではなくても、それはそれでいい。同じメニューを選んだというのには何らかの運命的な意味があるのだ。おそらく、彼女も僕と同じ境遇で、僕と同じように孤独な人なのだろう。……そういえば、いつも一人で歩いている所しか見ない。僕たちは同じ気高さゆえの疎外感や孤独感を共有しているのだ。……もしかしたら、彼女も僕と同じように、混んでいる時間帯を避けて、今のこの時間帯を選んで学生食堂に来たのかもしれない。行動パターンまで僕たちは似ているではないか。やはり僕たちは似た者同士なのだ。だから惹かれ合うのだろう。彼女こそは僕の運命の相手なのかもしれない。そうだ！　これは運命だ。彼女こそが僕のアリアドネだ！』

一方で、彼は激しい緊張にも苛まれだしていた。女子学生の熱い視線が自分に注がれていると決め込み、彼女に良いところを見せねばならないと焦りだしていたのだ。ここで、自身の上品でスマートな食べ様を、なんとしても女子学生に示しておきたかった。絶対に

失敗は許されなかった。彼にとってここでヘマを犯すことは、永遠に女子学生の愛を失うことを意味し、そうなれば、彼は愛を失う上に愛するものに見限られた惨めな敗残者という屈辱的な烙印を押されることになるのだ。それはまさに彼にとって死をも意味していた。

次第に彼の自意識は極限まで鋭敏になっていく。呼吸の一回一回、微妙な手の位置や体の角度、瞬きの一つ一つでさえ、自らの運命と生死を決定するように思われた。全身はさらにこわばり、箸をつかむ手の動作もおぼつかなくなっていき、箸を十センチ動かすだけでもやっとの思いになってくる。顔はいよいよ青ざめていき、ぎこちない鈍重な動作で何とか食事を進めていく。ご飯を口に運んだり味噌汁を啜ったりする動作は辛うじて出来たが、チキンカツを箸で切り分ける作業は恐ろしく困難を極めるようになっていた。女子学生の手前、出来る限り口を小さく開けたかったので、チキンカツをさらに細かく綺麗に切り分けようとしたことも困難さに拍車をかけていた。彼は激しく震える手を懸命にコントロールし、箸を動かす。

ふと彼の動作が止まる。チキンカツが石のように硬く感じられ、なかなか切り分けられなくなったのである。どうやら鶏肉の硬い筋の部分に当たってしまっているようだった。いよいよ彼の手の震えは激しくなり、動悸も激しさを増し、身体は石のように硬直し、顔は醜く引きつり、体中から大量の冷や汗が吹き出る。

『何でこんなときに限って、筋のあるところに当たってしまうんだ！　これは意地悪か？　これまでの僕の悪行の報いなのか？　それとも鶏の呪いか？　もし神が存在するとしたら、何故こんな意地悪を僕にするのだろうか？』

それでも彼は執拗に何とか箸で切り分けようと苦心する。すでに残りのチキンカツは一口でも食べられるほどの大きさになっていたし、筋のない部分から切り分けていくことも出来たはずである。しかし、彼は頑として筋の部分から箸で綺麗に小さく切りわけることだけに固執するのである。もうそれ以外のことは全く考えられなくなってしまっていた。

『頼む！　切れてくれ！』
一瞬彼は目を大きく見開かせ、口を歪め、懇親の力を箸に込める。次の瞬間、箸が折れた。乾いた木の枝を勢い良く折ったような小気味良い音が学生食堂に響いた。
彼は一瞬何が起きたか分からず目を白黒させていたが、すぐに事態を飲み込むと、顔から血の気が引いていくのをはっきりと感じ、文字通り目の前が真っ暗になっていくのを意識した。
『もうダメだ！　僕はおしまいだ！　これで愛は永遠に失われた！　さよなら、僕のアリアドネ！　……ああ、このままどこかへ消えてしまいたい。逃げよう。もうここにはいられない。もうダメだ。食堂から出よう。走れ。もう全力で走るしかない。走れ！　走れ！　食堂を出たらこのまま正門まで一直線だ。そして、そのままどこまでもひたすら走ろう。……ああ、畜生！　誰も僕を見るな！　いや、むしろ見ろ！　とことん見ろ！　バカにしたければすればいい！　笑いたければ笑え！　……何故だ！　何故こうなるんだ！　これは全部罰なのか？　仕事も勉強もせず怠惰な生活をしている罰なのか？　淫らな情欲に身を任してばかりいることの罰なのか？　愛する者に淫らな情欲を抱いた罰なのか？　愛する者の美しい姿を呪った罰なのか？　自然の摂理を呪った罰なのか？　トンカツを食べようとした罰なのか？　チキンカツ定食を食べた罰なのか？　自分が高貴だと思う傲慢さへの罰なのか？　これまでの全ての悪行の報いなのか？　ああ、ダメだ！　僕はダメだ！　一体何がいけないんだろう？　僕の何がいけないんだろう？　……いや、もうたくさんだ。何故いつも自分をダメだと卑下ばかりしなければいけないのだろう。冗談じゃない。もう卑屈にはうんざりだ。僕はここではピエロでしかない。とんだピエロだ。ここから逃れたい。今すぐこの現実から逃れたい。自分にふさわしい場所へ行きたい。ああ、一体僕にふさわしい場所はどこなのだろう？　それは今僕が生きている場所や時代には無いのだろうか？　……そうだ、きっとそうに違いない。ずいぶん前からずっとそう感じていた気がする。この現代とい

う時代。現代文明。現代社会。物で溢れ返り、知識と情報が氾濫し、世間や世論という名の愚衆が我が物顔の猥雑極まる現代社会。かつてニーチェが言った「おしまいの人間」という気高い理想も思想も持てず、幸福という名の憐れむべき快適な生活にしか目のない小賢しい連中が、地ノミの如く跋扈している現代社会。それは僕にふさわしくないものなのだ。だから僕はここでは常に生きづらさを感じなければならないのだ。……僕が仕事も勉強もせずに無為な生活を送るのにも、まっとうな理由があるのだ。断じて怠惰からではない。この先、苦労して真面目に勉強し大学を卒業したところで何が待っているのだろう。就職し、結婚し、会社のため、社会のため、家族のため、他人のためにあくせく馬車馬のように働くだけの退屈な人生ではないか。それは、おしまいの人間どもが営む幸福という憐れむべき快適な生活を支えるためだけの奴隷になることでしかないのではないか。実際、そんな快適な生活を支えるためにどれだけの人間がこき使われているのだろう。滑稽なことに、現代人は便利な生活を求めるために、かえって仕事を増やし、時間に追われ、自分で自分の首を締めている状況なのではないか。そんなことに巻きこまれるのはまっぴら御免こうむる。僕はもっと偉大なことのために生きたいのだ。何もしないのは現代社会に馴染み、その愚かなシステムの中へきっちり組み込まれることへの抵抗であり正当なプロテストなのだ。そうだ。そうに違いない。……畜生！　現代社会め！　僕の精神の気高さをいつも嘲笑いやがって！　それが高貴なる者、選ばれし者への現代社会からの報復ってわけか！　……これまでずっと意に反して己の身を下げ、そんな現代社会に馴染もうと卑屈に足掻いてきたこともあった。サークルのくだらない連中にも媚ばかり売ろうとしてきた。考えただけでも忌々しくなってくる。僕はいつだって自分の思うことや感じることに自信が無かったのだ。まったくどうしてこうも自信が無くて卑屈なのだろう。でも、もうそれも終わりだ。金輪際何者にも媚など売るものか！　こんな場所僕のほうから見限ってやる。僕は生まれる時代を間違えたのかもしれな

い。僕にふさわしい場所はもっと偉大な世界にあるのだ。神々や王が世界を統治し、武士や騎士といった兵どもが山野を駆け巡っているような神話的で英雄的な世界。ああ、そんなスリルに満ちた愛と冒険とロマンの世界は何処にあるのだろう？　頼む！　僕をそんな偉大な世界に行かせてくれ！　……あれ？　おかしい。何だか手足が勝手に動いている気がする。走るスピードがどんどん速くなっている。足が止まらない。この速さなら、オリンピックも夢じゃない……って、こんなときに何を考えているのだ。どうなっているんだろう？　まずい、この先に大通りの交差点がある。このままじゃ、車に轢かれるかもしれない。どうしよう、止まらない。……あれ？　何だか背中がむずむずしてきた。どんどん背中が盛り上がってきている気がする。どうなってるんだ？　痛い、痛くなってきた。ものすごい激痛だ。……まずい、交差点に近づいてきた。赤だ。止まれない。車が……。どうしよう。もうダメだ！　あっ！　……あれ？　体が軽くなった。背中の痛みもなくなった。僕は浮いている。……間一髪で助かったようだ。どういうことだろう？　この白い羽のようなもの、これは翼だろうか？　背中から翼が生えているのか？　どうやらそうみたいだ。かなり大きいぞ。全長四メートルはありそうだ。……僕は飛んでいる！　すごい！　僕は鳥になったのか？　すごいぞ。空を飛ぶことは古来究極の人類の夢だったじゃないか。それを僕は今叶えたわけか。やはり僕は選ばれし者、高貴なる者だったんだ。僕は超人にして鳥人になったのだ。……フェニックス！　そうだ、僕はフェニックスになったのだ。……みんな驚いて僕を見上げて見ている。どうだ！　ざまあみろ！　現代人め！　おしまいの人間どもめ！　お前らにこんな芸当無理だろう！　ああ、誰にも出来ないことを出来るってなんて気分が良いのだろう。愉快だ！　爽快だ！　痛快だ！　……ああ、素晴らしい眺めだ。実に風が気持ちいい。……あそこに見えるのは東京タワーだろうか？　東京に来て初めて見たかもしれない。ちょっと行ってみよう。……おっと、バランスと崩しそうになった。なかなか空を飛ぶのもコ

ツがいる。両羽に均等に力を入れないとどちらかに身体が曲がってしまう。……こうして目標に向かって少し頭の向きを下げると前に進むのか。……すごい。結構スピードが出るな。時速百キロは出るかもしれない。風を切るのが実に爽快。おっと、建物にぶつからないように気をつけねば。……東京タワーに大分近づいてきた。近くで見るとなかなか迫力があるものだ。さすがに日本一の高さだ。いや、今や日本一は東京スカイツリーか。よし、スカイツリーにも少し近づいてみよう。……なるほど、確かに高い。色といい形といいどこか近未来的だ。それに比べると、東京タワーにはどことなくノスタルジーを覚える。あの褐色がかった赤い色が懐かしい雰囲気を醸し出している。昭和という過ぎ去った時代を象徴しているようだ。……どうやら僕は黄昏を迎えて過ぎ去っていくものに愛着を覚えるらしいな。……よし、このまま上昇気流に乗ってどんどん上をめざそう。……大分高くなった。あっという間だ。すごい。都庁も新宿副都心の高層ビル群も見える。皇居も見えるぞ。薄っすらと富士山も見える。今日はこんなに空が澄んでいたっけ？　この時期にしては珍しいかもしれない。最高だ。こうして上から見れば、現代の都会も悪くない。さすがに東京は世界有数の巨大都市、花の都大東京。どこまでもずっと街並みが続いている。実にダイナミック。……それにしても、ここにどれだけの人が暮らしているのだろうか？　ああ、現代社会は人が多すぎる。こう人が多いと一人一人の存在が余りにも希薄だ。もうあと百年もすれば、ここにいる人々の多くは名もなきその他大勢として忘れ去られるだろうに、皆日々の生活に必死であくせくし、小さなことで思い悩んでいる。何だか現代人が憐れに思えてきた。いや、現代人に限らない。古来ほとんどの人間が名もなきその他大勢だったんじゃないか。人間一人一人はなんて憐れな儚い存在なのだろう。　……高度が大分上がってきている。早くも低い雲にも達そうとしている。数百メートルには達しているようだ。……あっ、今雲を通り抜けた。少しひんやりした気がする。そういえば、幼い頃、雲を掴みたいと思ったものだ。雲

の中に潜ってみたいと思った。それが今叶っているわけか。夢は思いがけず叶うもんだなあ。よし、このままさらに上を目指してみよう。……かなり高くなってきたな。車の姿も、もう確認できなくなってきた。……あっ、海だ！　東京湾が良く見えるぞ。この高さで水平線を見ると、地球が球体であることもはっきりわかる。すごい。すごいぞ。……少し肌寒くなってきたな。耳鳴りもする。気圧も大分下がってきているみたいだ。一体どこまで上昇できるのだろう？　限界を目指してみるか。このままどこまでも高みを目指そう。もう地上には用は無い。ひたすら高みを目指すのだ。そして、僕は天空の藻屑へと消えるのだ。ずっとそのことを望んできたのではないか。僕はずっと空を見ていたかった。それどころか空そのものになりたかった。抜けるような透明な青空。幻想的で壮麗な夕焼け。壮大でダイナミックな雲の流れ。何億光年もの彼方へ想いを巡らせる満天の星空。幼い頃のそんな様々な表情を見せる大空への憧れ。文学にもその憧れの気持ちや感覚をずっと求めていた。そうだ！　分かったぞ。これが僕の夢、僕のロマンチシズムの正体だったのか！　ああ、なんて素朴なロマンチシズムなんだ！　……もう大分高度も上がってきたらしい。空気がかなりひんやりしてきた。体の震えが止まらない。息苦しくもなってきた。耳が痛い。寒い。……ああ、何だろう、この湧き上がってくる荒々しく凄まじい恐怖感は。翼を手にした興奮ですっかり忘れていたけど、今更ながら自分が高所恐怖症だったことに気づいてしまった。そろそろ下に降りようか……。でも、どうやって下降すればいいのだろう？　どうも体を上手く下に向けられない。翼も上下に少し動かせられるだけで、こうして開いた状態でいるしかないようだ。下手に姿勢を変えようとするとバランスを崩してしまうし……。何よりもう恐くて下を見られない。このままどこまでも上を目指すしかないのか？　何だか上方から迫ってくる真っ青な空と太陽が神々しくも不気味に思えてきた。……もう、どれくらいの高さまで達したのだろう？　すでに二千メートルくらいは達そうとしているのだろうか？　身体は

未だ上昇を続けているらしい。ああ、手足が痛い。顔も痛い。表情筋も動かしにくくなってきた。意識も少し朦朧としてきたが、これは高山病の症状だろうか？　これだけ急上昇したのだから無理もないか。……段々と過酷な環境になってきてるな。もっと上に行くと僕はどうなるんだろうか？　気温もかなり下がってきている。僕はこのまま死ぬのか？　どうやら上空は天国なんかじゃないようだ。容赦ない死の世界だ。これが現実。でも、そんなことくらい最初からわかりきっていた。上等じゃないか！　もうどこまでも高みを目指すのだ。死など怖れない。　……あれ？　何か衝撃音が聞こえてきた。何だろう？　あっ、飛行機！　……そうか、飛行機はまだまだあんなに上を飛んでいるのか。今あの中に人がいるのかと思うと少しホッとするな。……思えば不思議な話だ。こんな上空をあんな大きな鉄の塊が飛んでいるとは……。いや、今や人類は宇宙へも行く。考えてみると想像を絶する話だ。文明がすでにそんなところまで来ているとは……。それは素晴らしいことなのかもしれないが、僕は段々と虚しくなってきた。地球の外にまで文明の手が及んでいるとは全く興ざめだ。何だかこれ以上高みを目指すのはバカらしくなってきた。もう、到底僕にはついて行けない。もはや文明は僕の貧弱な思考、感覚、知識、想像力などは遥か及ばないところに達している。いつだってそうだった。未知の世界や新しい真理を探し当てたつもりでも、大抵それは既に世間に広く知られていることなのだ。どこへ行っても、すでに大勢の先客で溢れかえっていて、何もかもすっかり彼らの手垢に塗れ、もう全てが無味乾燥で色褪せて見えてしまうのだ。そこには全く深遠さも神聖さも感じない。今目にしているこの光景も、すでに特別なものじゃなくなっているのだろう。誰もが知っていること。誰もが映像で見られるもの。お金さえあれば誰もが体験出来うること。一般的な常識にさえなっている。そこには冒険のスリルも発見の喜びもない。全く味気ない話だ。もはや、僕の余りに素朴なロマンチシズムは、この現代社会の中ではありふれた子どもっぽい夢想にすらならず、常に挫折する運命

にあるのだろうか？　……ダメだ、もう限界だ。耐えられない。……もう、いい。何もかも分からなくなった。降りたい。何がフェニックスだ。何が高貴なる者だ。何が選ばれし者だ。もう、地上に降りたい。地上が懐かしい。こんな思いまでして高みを目指して何になるのだろう。まるで無意味だ。僕を地上に戻してくれ！　……うわっ！　何だか急にもの凄い突風が吹いてきたぞ！　まずい！　バランスを崩した！　身体が木の葉のように舞っている。何とか体制を立て直さなければ。……ダメだ！　もう完全に制御不能だ！　……あっ！　翼が折れてる！　まずい！　これは落ちる！　落ちるぞ！　……今のは幼い頃にジェットコースターで体験した感覚と同じだった。脳みそや内臓がふっと浮き上がってくる感覚。……幼い頃か。そんな無邪気な時代が僕にもあったなあ……なんて感慨に耽っている場合ではない。落ちている。確実に落ちている。落下速度を増していることがよくわかるぞ。重力加速度は毎秒いくらだっけ？　空気抵抗はどのくらいだろう？　……なんて悠長に考えている場合じゃない。僕は死ぬ。決定だ！　ああ、こんな形で人生を終えるとは。人の死期とは実にあっけなくやってくるものだ。この高さだと地面に叩きつけられる時の衝撃はどのくらいなのだろう？　痛みは？　僕は人としての原形を保てるのか？　見るも恐ろしい凄惨な姿を人前に晒すのだろうか？　どうやらそれが身の毛もよだつ恐ろしい現実らしい。確実にそんな死の現実が迫ろうとしている。それにしても、自然も容赦が無い。今どうあがき、どう悔いたところで重力は無慈悲に働くのだ。全くもって融通が利かない。僕は確実に容赦なく地面に叩きつけられる。……ああ、目が回ってきた。身体が錐もみ状態で回転しているらしい。もう、平衡感覚が分からない。どっちが上で、どっちが下か？　でも、落ちていることだけは確実に分かる。……空気も大分暖かくなってきた。もう、かなり落下してきているようだ。落ちるのは本当にあっという間だ。もうすぐ死ぬ。死んだらどうなるんだろう？　天国か？　地獄か？　何かに生まれ変わるのか？　もう何も無いのか？　死んだらどんな

世界が待っているのだろう？　どんな感覚が待っているのだろう？
　それも間もなく明らかになるのだろう。そういえば、人は死ぬとき、過去の記憶が走馬灯のように蘇ると聞く。でも、僕には何も思い出せない。残酷なまでに現在という意識だけははっきりしているのだ。……いよいよ死が迫っている。やはり僕は死ぬのだろうか？　余りにも唐突で何だか実感に乏しい。もちろん怖いが、どこかで安堵もしている。これでやっと死ねる。多分、これで全ての苦痛ともおさらば出来るだろう。……でも、何だろう。この込み上げてくる悔しさは……。悔しいのだ。涙が出るほど悔しいのだ。僕はまだ何もしてないじゃないか！　まだ何も経験してないじゃないか！　何だかそんな気がするのだ。……でも、もうどうにもならない。手遅れだ。……せめて誰もいないところに落ちれば良いのだけど……。誰も巻き込みたくない。無残な屍も晒したくない。これは自分のためじゃない。僕の無残な屍は、見た人をきっと悪夢で苦しめるに違いないだろうから……。とにかく、僕を海に落としてほしい。東京湾の真ん中に。そして、そのまま海底に沈もう。海は全ての生物にとっての故郷という。僕は海に還ろう。神よ、せめてこの願いは聞き入れ給え！　……海だ！　今真下に海が見えた。どうやらこれまでの飛行で大分海側に移動していたらしい。ああ、感謝します。船も無い様子。今なら大丈夫だ。もう、心置きなく落下できる。……さよなら、愛しい僕のアリアドネ。……さよなら、僕の夢、僕のロマンチシズム……』

　全身を激しくビクッと揺らし、ふと彼は我に返る。そして、しきりに目を瞬きさせながらきょろきょろと周囲を見渡す。
　彼は学生食堂にいた。幾分時間が経っていたようである。すっかり学生の数もまばらになっていた。有線放送で流されているポップミュージックがやけに彼の耳についた。体中汗びっしょりだった。
　同じテーブルに着いていた女子学生はすでに食事を終え、食器と盆も返却口に戻している様子であった。長い髪を後ろで束ね、テー

ブルの上に文献やノートを広げ、何やらレポート課題に取り組んでいるようである。彼の手元には、折れた箸が皿の横にきっちりそろえて置いてある。

『……夢か。背中に翼は……あるわけないよな。箸が折れたことは現実らしい。それこそ夢であって欲しいけど……』

彼は深くため息をつくと、折れた箸を持ってそっと立ち上がり、食器の返却口まで歩く。

「あのー、すいません。これ折っちゃいまして……」

顔を赤らめ、しきりに首の後ろをかきながら、箸を折ったことを先ほどの厨房のおばさんに報告する。

「あらー、折れちゃったの？　珍しいことがあるわねえ」

おばさんは驚き、少し呆れるように微笑みながら応じる。

「すいませんでした」

彼は神妙に頭を下げ、代わりの新しい箸を取って戻る。席に戻ると、すっかり冷めた残りのご飯と味噌汁をゆっくり平らげる。いったん周囲を見渡してから、急いで残りのチキンカツも一口で平らげた。鶏肉の筋の部分は目をつむりそのまま我慢して飲み込んだ。

時折彼は女子学生の方をちらちら見てみるのだが、女子学生は口を少しすぼませ、澄ました表情でひたすら黙々と文献を読んでいる。彼のことを気にする素振りは一向に見せない。そんな様子を見ていると、彼は女子学生が自分とは何の接点も無いあかの他人で、最初から自分のことなど全く眼中になかったことをありありと物語っているように思われた。もう全てにおいて、自分がその女子学生には到底及ばないように感じるのである。そして、何か自分独りだけが世の中から完全に置き去りにされているような気にもなってきて、きりきり胸を締め付けられるようなほろ苦い息苦しさを覚えるのであった。

彼はここでもう一度深くため息をつく。

『やっぱりそうだよな……』

そんなことをしているうちに、そろそろ熱力学の講義の時間が近

づいてきていた。まだ少し早い気もしたが、彼は立ち上がり、食器を返却口に戻す。厨房を見渡してみると、先ほどのおばさんの姿は無かった。彼は荷物のカバンを取りに引き返してから、ゆっくりと学生食堂の出入り口へと向かう。出入り口付近で、女子学生の方をもう一度振り返って見てから、さらにもう一度深くため息をつく。

『さよなら、僕のアリアドネ……か』

自嘲気味にそう心の中で呟き、学生食堂を後にする。

そのまま教室へ行ったが、講義が始まる時間が迫っても誰も来る気配が無かった。掲示板で確認すると、熱力学の講義は休講になっていた。彼は家路につくべく、のろのろとした足取りで裏門の方に向かう。構内は学生の姿がすっかりまばらになっている。

少し歩くと、サークル棟の方から一人の男子学生が向かってくるのに気づく。男子学生は昼休みにサークル室で一緒になった後輩達の中の一人だった。彼にはその男子学生が自分に怒っているように思え、ぎこちなく顔を斜めにうつむかせながら歩き、決まり悪そうに視線を逸らし続けていた。

「おつかれさまでーす」と、すれ違いざまに、男子学生は彼に挨拶する。彼も慌てて右手を少し上げて笑顔で会釈する。そして、ほっと胸を撫で下ろす。

「あっ、合田さん」

突然後ろで声がする。彼は肩をビクッと揺らし立ち止まって振り返る。男子学生が彼に少し近づいてたずねてくる。

「今週の土曜に新歓コンパあるんですけど、合田さん来ます？」

「……いや、ちょっと……」

「そうですか。一応伝言ノートに詳しい場所と時間書いときましたから、もし来る時は確認してください」

「……分かった。ありがとう」

「たまには飲み会にも顔出してくださいよ」

「……そうだね」

「じゃ、おつかれさまでーす」

「お疲れ」
男子学生は爽やかな笑顔を残し颯爽と去っていく。彼はしばしその後ろ姿を見送ってから、再びのろのろと歩き出す。家路につきながら、彼は今日のこれまでの自分の行動を振り返り、苦笑しながら何度も力なくため息をついていた。
『お粗末だ。実にお粗末だ。僕はこんな調子でこの先大丈夫なのだろうか？　どうしてこんな風になってしまったのだろう？　子どもの頃はこんな風じゃなかったはずなのに……。いつからこうなってしまったのだろう？』
ぽかぽかとした気だるくて淡い午後の日差しが彼を包んでいる。ふと空を見上げると飛行機雲が目に入った。飛行機雲は西から東の方に少し拡がって長く伸びていた。西の空を見ると低気圧が近づいているのが分かった。すでに薄い雲が西から空を覆い始めていた。彼は表情を曇らせ、再びうつむく。
『夢は終わった。何だかそんな気がする。この先どうなるのか？　どこに向かっていけばいいのか？　分からない。もう、何もかも分からなくなってしまった。ただ、いつまでもこのままで良いわけないことだけは確かだ。この先、何かとてつもなく辛く苦しいことばかり待ち受けている気もする。……一体僕はどうなるんだ……』
アパートの傍まで来て、隣の一軒家の二階に目をやると、大学に向かうときに挨拶してきた奥さんが、ベランダで乾いた洗濯物を込んでいる姿が目に入った。奥さんは彼の存在に気づかないようだった。彼は一瞬声を出して挨拶するかどうか迷うが、結局無言でその光景を静かに見送り、アパートの自分の部屋に入っていく。
彼は玄関で靴を脱ぎ捨て、部屋に入るなりカバンを投げ出し、そのまま畳の上にだらりと身体を横たえる。すぐに猛烈な眠気が襲ってきた。
「疲れた……」
小声でそう呟き、彼はしばしの眠りに落ちる。
こうして英雄の外出は終わる。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4101z/

英雄の外出

2011年12月14日00時48分発行